

<小論文>

ウェルビーイングを高める総合的な学習の時間 -コロナ禍を経験した中学2年生へのアンケート調査とフィールドワークから-

関西大学非常勤講師 新谷 龍太郎

大阪大学大学院 秋山 みき

1.問題意識

ウェルビーイングとは、1946年の世界保健機構(WHO)で掲げられている概念であり、単に疾病や障がいがないことを意味するものでなく、身体的、心理的、社会的に安寧な状態であると宣言した際に用いられた。1989年の国連総会で採択された児童権利条約の前文にも、「家族のすべての構成員特に児童の成長及びウェルビーイングのための自然な環境として、社会においてその責任を十分に引き受けることができるよう必要な保護及び援助を与えられるべき」と書かれている。

OECDの「The Future of Education and Skills:Education2030」では、ウェルビーイングを保持する上で大切な資質・能力として「新たな価値を創る」「緊張やジレンマの調整」「責任をとる」ことなどが挙げられており、これらは社会参画を通じて身に付く力であるとされる。PISA2015では、端的に「健やかさ・幸福度」と説明されており、「幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力」と定義される。

社会でデジタル化が進行することで、ウェルビーイングにどのような影響があるかに関心が寄せられている。例えば、OECDの2019年の報告書『感情的ウェルビーイング:21世紀デジタルエイジの子どもたちのために(Educating 21st Century Children: Emotional well-being in the digital age)』(OECD2022a 訳書)では、2015年のPISA調査から、インターネットに接続できないと平均54%の生徒がいらだち、その傾向は社会経済的に恵まれていない生徒ほど多いという研究が紹介されている。また、テクノロジーの適度な利用は精神的ウェルビーイングにプラスに働いたり、友人との交流や情報検索などにも利用されることから、利用しないことや過度に利用することは小さな負の影響を及ぼすという逆U字型の曲線を描くことや、自分や子どものデジタルスキルに自信のある親は、子どもの活動をあまり制限しないことなどの研究も紹介されている(OECD2022a 訳書, pp.30-31)。オンライン上の子どものウェルビーイングを守り育むためには学校と家庭が協力する必要があるが、社会経済的に不利な家庭では、学校運営に参画するために仕事の調整や育児、移動手段などいくつかの障壁を乗り越える必要があることに加え、デジタルスキルや知識を持っていないことが多い。そのため、家庭に対しては「理想の子育て」を要求するのではなく、家庭と生徒のニーズに対処する協働形式をとることに加え、学校でなくコミュニティに照準を合わせた協力体制を敷くことが提案されている(OECD2022a 訳書, p.326)。

OECDが2021年に報告した第一回社会情動的スキル調査(SSSES)では、副題の「教科の学びを超える力」として社会情動的スキルに着目しており、生徒のウェルビーイングや学業成績の根底をなすものと位置付けている(OECD 訳書 2022b, p.4)。特に、ストレス耐性や楽観主義、感情コントロールなどの心理的ウェルビーイングを取り上げ、生活満足度やテスト不安との関係を考察している。15歳児は10歳児と比べ生活満足度やウェルビーイングの水準が低く、テスト不安の水準が高く、この傾向は女子によくみられる。社会経済的に恵まれない生徒は、しばしば学校から心理的ウェルビ

ーングを高めるための支援が限られていたり、なかったりすることから、学校が生徒自身の心理的ウェルビーイングを認識、理解し、調整を行うのを手助けすること、教員が行動初期の変化や精神的苦痛の兆候を見極め、支援するために研修を実施することが大事と指摘されている(OECD 訳書 2022b, p.6)。また、社会情動的スキルは、男子よりも女子において、社会経済的背景が恵まれた生徒よりは恵まれない生徒において低くなることが指摘されている(OECD2022 訳書 b, p.24)。

上記のように、ウェルビーイングは新型コロナの影響を踏まえてより重要なテーマとなっており、今日着目されている社会情動的スキルとも強く関係していることがわかる。加えて、ジェンダーや社会経済的背景を踏まえて、家庭やコミュニティとの協働を視野に入れた実践の蓄積と分析が求められている。そこで本稿では、そこで、これまで地域と協働した取り組みを行ってきた学校において、新型コロナ禍が学校生活に大きく影響した学年に着目し、その実践を見ていくことにする。生徒自身で、自分たちの所属する学校という社会において、ウェルビーイングを高めるために何ができるかを考え、行動し、振り返りを通じて学んだことを実践報告として取り上げることで、ウェルビーイングを高めるために学校や教師ができることは何かを考えてみたい。

2. ウェルビーイングを高める授業の概要

2.1. 研究対象と調査方法

本稿で取り上げる関西圏のA中学校の学級数は、1年生3学級123人、2年生4学級137人、3年生3学級116人、支援学級6学級、通級指導教室1学級の計17学級(2021年4月時)であり、教職員は計51人である。社会参画力の育成に向けた授業改善と集団づくりに向けて地域と協働しての取り組みを進めてきた歴史を持ち、平成22年度から25年度までは文部科学省の研究開発学校としてキャリア教育をテーマとした新科目の開発を行った。その根底には人権教育があり、令和4(2022)年度は文部科学省の人権教育総合推進地域事業の指定を受け、「自他の人権を守るための行動力を育む効果的な指導方法」の研究開発に取り組んだ。

本稿で対象とするのは、令和4年度の中学2年生の学年である。当該学年は、小学6年生の時に新型コロナが蔓延し、修学旅行に行けなかったり、中学校が始まっても合宿行事や職業体験が中止になるなど新型コロナに振り回された学年である。それゆえ、ウェルビーイングを高めることは特に重要と考えられた。

そこで、調査として2021年4月から2022年12月までに58回のフィールドワークを行った。総合的な学習の時間の授業及び会議の参与観察を中心とし、その他の授業や部活動などの様子、教員への聞き取りなどを行った。また、2022年10月から11月末にかけて、筆者に加え、研究協力者の大学院生や、A中学校で卒業研究のフィールドワークや教育実習を行う大学生、地域の学習会などに参加する大学生が、生徒たちをファシリテートする役割を期待され、総合的な学習の時間に参画した。大学生は、筆者の勤務校の2回生や3回生、及び研究協力者の大学院生のゼミに所属する3回生などである。

A中学校は、志水宏吉代表「社会関係資本を生かした学校づくり『力のある学校』」の視点から(20K20517)の調査対象校でもあるため、同研究プロジェクトでのデータも参照した。同プロジェクトでは、2022年1月から2月にかけて、東北及び関西の小学校および中学校を対象として質問紙調査を実施し、中学校だけで16校、1,691人の回答を得ている。質問紙調査は、子ども同士や

学級、教師や家庭、地域とのつながりを測る社会関係資本に関する質問群と、自尊感情やレジリエンス(粘り強さ)、ウェルビーイングや共生意識、一般的信頼などの非認知能力(社会情動的スキル)に関する質問群により構成されている。調査対象群の中では、社会経済的地位は中程度であり、学習理解度も中程度という位置付けであった。通塾率は比較的高かった。社会関係資本で見ると、平均的であるが教師と子どものつながりが比較的高く、非認知能力ではレジリエンスは高いが、自尊感情やウェルビーイングがやや低いという結果であった。このように、アンケート調査からも、A 中学校においてウェルビーイングは課題であることがわかる。同調査は、本稿で対象とする学年が中学 1 年生の終わりに実施されている。その後およそ一年間かけて、中学 2 年生になりどのような変化が生じたのかを検証してみよう。

2.2. 単元構想

令和 4 年度の中学 2 年生では、5 月から7月にかけてキャリア教育として「働くこと」をテーマとした総合的な学習の時間を行った。例年であれば職業体験の期間であるが、新型コロナの影響もあり、ここ数年は地域に出での活動ができていない。夏休みを挟み、以下のような予定でウェルビーイングを高めることをテーマとした総合的な学習の時間が始まった。授業は原則木曜日の 5,6 限の 2 コマ続きで行われた。実際には授業調整のために前後した回もあったが、ほぼ予定通りに実施されている。事前にアンケートをとり個人の関心をもとにした学級の枠を超えた 10 グループで取り組まれた。各グループに学年付きの教員が 1,2 人付き、加えて、ファシリテーターとして大学生が一人ずつ、グループ別活動期間中は継続して同じグループに配置された。10 月末までに 14 コマかけてグループで活動し、ウェルビーイングを高めるための取り組みを学年全体に対してプレゼンテーションし、投票結果を踏まえてその活動を学年全体で行う、という流れである。投票は自分のグループ以外とした。

各授業は、SRPDCA というマネジメントサイクルと対応している。S は Standing (立ち位置) であり、教師を含め、自分がどのようにそのテーマと向き合うかを考える時間である。そのテーマをいかに「我が事」として落とし込めるかは、特に重要とされる。R は research (調査・研究) であり、生徒がテーマについて調べることでより質の高い計画を練り上げることにつながる。教師もまた、学術的なことも含めて事前学習を行うことが期待されている。その上で、Plan-Do-Check-Action へと進むが、会議では常に「いま話していることは Do (どう実施するか) ですね」、「それをする中で、集団の質が高まるのか(Check)」など、「どのようにするのか」だけでなく、「なぜそれをするのか」「誰にどのように響くのか」という視点が持ち込まれる。

今回の取り組みでも、子どもの実態からスタートして、ウェルビーイングをテーマとして設定した。係や委員会活動に意欲的に取り組もうとする生徒は多く、自分の意見を主張できるが、一方で級友とのつながりを持つことに不安や緊張を感じる生徒もいる。ここには、少なからず新型コロナ禍の影響もあると推察できる。これまでであれば、中学校に入学する前から、小学校間での交流もあり、入学式後も様々な活動を通してクラスが作られてきた。しかし、新型コロナ禍により、こうした活動が制限されたまま中学生としての 1 年間を過ごしてきた。中学 1 年生の 11 月末になりやっと出かけられた校外学習で、クラスを超えて一緒に楽しそうに遊び、集合写真でマスクを外す際に、クラスメイトの顔を興味深そうに見合う。我慢を続けてきた学年だからこそ、身近な社会としての学校の課題解決

に向けてグループで他者と協力することで、自分で決めて行動する力や、課題を設定する力、実行力、コミュニケーション力、発信力などを身につけてほしいと言うのが学年の教員の思いであった。

表1 単元計画「自分たちで well-being な社会をつくる」

日程(時程)	内容	授業形態	SRPDCA
9/8(5,6)	外部講師「well-being な社会って?」	教室でリモート参加	S
9/29(5,6)	個人で学校の現状・課題を考える グループで取り組む課題を決める	各クラス教室	R
10/6(5,6)	目標設定やアウトラインの作成	グループ別活動	P
10/13(5,6)	リサーチ(アンケートや事例調査)	グループ別活動	P
10/20(5,6)	プレゼン作成	グループ別活動	P
10/26(6)	プレゼン作成	グループ別活動	P
10/27(5,6)	プレゼン作成	グループ別活動	P
11/2(5)	リハーサル	グループ別活動	P
11/4(6)	調整	グループ別活動	P
11/10(5,6)	プレゼンテーション・投票	全体(体育館)	P
11/17(5,6)	投票結果の発表・振り返り	各クラス教室	P
11/24(5,6)	全員で活動	未定	D
12/1(5,6)	全員で活動	未定	D
12/8(5,6)	全員で活動	未定	D
12/15(5,6)	活動の振り返り 冬休み明けの行動を考える	各クラス教室	C A

2022.8.29 会議資料を元に筆者がまとめ直した 断りがないものは 5,6 限の 2 コマ

別のテーマで実施した回については割愛した

2.3.単元開始時の様子

9月8日の外部講師の回は筆者が担当した。ウェルビーイングについてのイメージを聞き、PISA やユニセフなどの定義や調査結果を紹介した上で、「私にとってのウェルビーイング」について考えてもらおう、という流れである。直後に運動会のリレーが予定されていたことから、走るのが得意・苦手に関わらず、誰もが安心して楽しく取り組めるリレーにするためにどうすれば良いかを考えてもらい、現状を5点満点で評価した上で、1点高めるために何ができるか、という構成のワークシートを用意した。

新型コロナ感染拡大予防の観点から、筆者が別室から Google meet を用いて各教室に話しかける、という形式となったが、生徒の反応を見るために、各クラスから2名、計6名の生徒にも別室で参加してもらった。筆者が夏休み中に新型コロナに感染し自宅待機となった際にウェルビーイングが低下した、という話をすると、2名の生徒が「私も」と共感してくれた。「コロナにかかった」ことを、気軽に人に話せない息苦しさを共有できた瞬間であった。クラスが別々ということもあり、別室での

生徒たちはクラス内では話しづらいテーマについてもよく話した。例えば、「(体育祭の練習について) 体育委員に任せきり」「協調性があると言えば、ない。あるときはあるけど」など、クラスの状態も場面によっては言いたいことがある、という本音も見られた。また、日頃は教室に入りづらい生徒も別室で参加しており、「インスタとか、ウェルビーイングのアピールやん。」と、SNS と関連する発言を担当教諭に漏らしていた。

同日に回収できたワークシート(2クラス 76 名分)を見ると、「いまの私たちのウェルビーイングは 5 点中何点?」の質問について、1 点が 1 人、2 点が 15 人、3 点が 39 人、4 点が 17 人、5 点が 4 人であった(2.5 点や 1.5 点と回答した 3 人は繰り上げて数えた)。全体の平均値は 3.09 点(クラス平均の差は 0.2)であった。以下は、各点数をつけた生徒の主な理由と、ウェルビーイングを高めることに対する意見である。

表2 2022 年 9 月 8 日時点のウェルビーイングの点数とその主な理由

点数	理由	1 点を高めるために
2 点	テキパキしていないから 差別したり、笑うことを止めない 教室に来られていない人がまだ多い 明るすぎて授業中うるさい	まず楽しくする 自分で善悪を判断できるようにする 聞いていて嫌な発言をしない メリハリをつける
3 点	みんながみんな良い状態とは言えない。 切り替え不足 みんなベル着を頑張っているから。 別室にいる子は良い状態ではない どっちにも転べる状態 一人一人個性を持ち、クラス目標を大切にしているが、ウェルビーイングと言われると少し違う 全員が幸せかはわからない ケンカとか少ないし、雰囲気いい	無理に高める必要はない。 会話、褒める、協力 学校に来たいと思えるようにする。 皆の気持ちを考えながら行動する 困っていることや不安なことがある人を助ける 居心地の良いクラスにする(安心できるクラス) コーチングであったように「存在評価」をする みんなで協力して体育祭練習をする 喋ったことのない人とも関係を深める
4 点	助け合えて楽しいクラスだから あまり先生の話聞いていない時がある 結構頑張っている まだ喋ったことのない人がいる	勝つための練習をする もめないようにしっかり話し合って解決する 互いに互いを尊重する あまり関わりのない人とも関わる
5 点	今の自分に満足している ちゃんとベル着できているから みんな仲良し、私は楽しいから	みんなのことを知る いろんな人と関わっていく

生徒のワークシートでの回答を元に、特定を避けるため、一部表現を修正して掲載した
なお、1 点の生徒については特定を避けるため、割愛した。

上記は生徒の声の一部であるが、比較的低い 2 点をつけた生徒は、その理由として授業中の規

律や、いじめ・差別を抑止できない雰囲気があることを理由に挙げた。つまり、安心してそこに居られるかどうかを判断基準としているようであった。興味深いのは3点をつけた生徒たちである。理由の多くは、「ウェルビーイングかどうかを改めて聞かれると、どちらかわからない」「自分は悪くないと思っているが、他の人がどう思っているかわからない」と、自問中であるために、保留としての「3点」をつけたと思われる様子が見られる。改善に向けて建設的、具体的な意見が出ていたのもこの生徒たちであり、別室登校をする生徒や、誰もが認められるクラス、これまでの関係性をより広げようとする姿勢などが見られた。4点をつけた生徒は、クラスの状態を良いと認めつつも、リレーで勝つことや問題解決、相互尊重など、具体的な成果や一步踏み込んだ関係性のイメージが見られた。一方、5点をつけた生徒は、今の状態が「居心地良い」と感じているが、そこに安住するのではなく、他の生徒はどういう気持ちであるかを推察する方向にも意識が向いたようであった。OECDの報告書(OECD 訳書 2022年 a,p.104)では、楽観的な生徒ほど、生活満足度と心理的ウェルビーイングが高いと指摘されているが、その傾向が部分的に表れている。

このような状態から、グループ別活動などを通じて、生徒たちがどのように変化していったのかを見てみよう。

3. ウェルビーイングを高める授業実践

ウェルビーイングを高めることを目標とした単元は、現在の学校に対する思いや変えたいところなどについて生徒が考える時間から始まった。学校に焦点を当てた単元の構成について、担当したA先生(20代女性)は以下のように語る。

A先生「これまでのところで、働くって先のこと、未来のことをやって、働くというところから、もうちょっと身近に返したほうがいいかなと思ってたので、学校ってテーマでやっていこうと。」
(2022/12/20 A先生インタビュー)

生徒たちの将来に関わる「働く」というテーマを扱った前回の単元を終え、A先生は再び生徒たちにとって身近なテーマに返す必要性を語った。そうした経緯で、生徒たちが日々を過ごす学校という場において、ウェルビーイングを実現する方法を探る単元が採用されることとなった。

生徒たちが自分たちの通う学校に関する課題意識を整理する時間を経て、同様の関心を有する生徒たちがクラスを超えて共に活動するグループ活動が始まった。各グループ12人程度、学年全体で10チームである。1教室あたり2グループとなるように教室が割り当てられており、そこに学年の教師やボランティアの学生が数人ずつ配置された。なお、教師のグループ活動への介入の程度は、教師の考えや教室の雰囲気によって異なり、教師が積極的に介入しながら議論を深めるグループもあれば、生徒の主体的な考えや進行を引き出すために最低限の関わりに留まるグループもあった。

グループ活動では、生徒たちがウェルビーイングな学校づくりを考える中でマイノリティの立場におかれうる人々の視点から提案をする様子が度々見られた。例えば、理不尽な校則を変えていくことをテーマとしたグループでは、以下のような提案がなされている。

校則グループの中ではさらに具体化した課題に対して、「多様性を考える」グループができていた。そこでの話題は主に制服の話である。スカートとズボンの2択しか選べないこと、ベストやカーディガンの色が指定されていることなどが挙がる。また、「絶対全員買わなあかんってなってるけど、お金ない家庭とかが無理やり買わされると…」と意見が出たりしている。(2022/10/13 フィールドノーツより)

さらに、同日に別の教室で活動していたグループからも、学校や教室に来られていない生徒たちについて気にかける発言が度々出てきていた。

生徒同士の関わりを増やすために、不登校傾向のある生徒たちがなぜ学校に来られないのかを考え始める。最初に出た意見は「単に授業受けたくないだけじゃないよね」というもの。そこから「背景が他にもあるんだろうな」「大人数が好きじゃない？」など生徒たちなりの考えが提示された。それにより、「大人数が嫌いな人がいるならグループでできる遊びは...」「大人数が好きなのは...」と議論が深まっていった。また、短時間ではあったが別室登校の生徒2人も授業の話し合いに参加していたようだった。(2022/10/13 フィールドノーツ)

こうした視点は、生徒たちが普段の教育実践を通して身につけた仲間の気持ちを考える態度の表れだと考えられる。ウェルビーイングの向上を目指した今回の単元が、学校の教育理念と合わさって、より良くなっていく可能性を示しているといえよう。

多様な立場の生徒たちがウェルビーイングを高められる学校づくりについて話し合いを重ね、単元の中盤に中間発表会が行われた。グループを配置する教室を変え、これまで一緒に活動していなかったグループと現時点での企画を報告し合う、という内容であった。そこでは、思考ツールのPMIチャートに基づいて「よかった点(Plus)」「課題(Minus)」「興味深かった点(Interesting)」の三項目でコメントを送りあった。以下は、翌日、他チームからのコメントを受けて授業の後半戦に挑む生徒たちの様子である。

「総合学習の授業をもっと活発で楽しいものにしたい」とテーマを設定していたグループは、コメントの復習から活動を始める。このグループでは、否定的なコメントに対する言い返しが目立つ。「学校に来ていない生徒が参加できない」というコメントには、ロクに「不登校の人と一緒に作業するって言ってんのに!」など怒ったような反応がある。B先生は「でも、その人のことを考えるのもウェルビーイングやん。」と続け、議論を深めようとする。

生徒A「でもそんなんさ!裏方とかで、そんなに来てない人やったら...」

B先生(30代男性)「(学校に来てない生徒にも)役割ちゃんとおあるよってことやな?」

生徒A「本人は参加したくないかもしれへんから、裏方で、とか。前に出るのは...とかやったら...とかを(自分たちは考えているのに)」

B先生「いいんちゃう?ポスター作ってもらおうとか。」(2022/10/27 フィールドノーツ)

課題を指摘するコメントに対して、生徒たちは自分たちの考えがうまく伝わらない苛立ちを表出し

ている。こうした姿は、生徒たちの自尊感情の低さとそれゆえに自分を守るために攻撃的にならざるを得ない状況を表しているように思える。しかし、一つ一つのコメントに向き合い、意見を無視したりコメント主を責めたりしないように促す B 先生の働きかけにより、生徒たちも会話を諦めずに粘り強く取り組んでいた。ここには、A 中の生徒たちのレジリエンスの高さとその背景にある教師の働きかけが見て取れるだろう。

さらに、こうした教師の働きかけの背景には、単元を作り上げる上で投票数や評価などの価値だけにこだわらない空気感を作ろうとする教師たちの意図があった。

A 先生「B 先生が、そこに至るまでのグループ活動とかがウェルビーイングやと思う、あんな一生懸命話し合ったやん、っていう話をしてくださったので、グループ活動でウェルビーイングが上がるのを感じたって子もいました。」(2022/12/20 A 先生インタビュー)

単元の流れは、各グループの企画を発表しあって、学年で実施する一つの企画を選ぶ、というものであった。しかし、教師たちは意識的に、企画が選ばれることだけに価値を置かないようにし、そうした考えを積極的に生徒たちにも伝えている。そのため、生徒たちが企画の作成に取り組む過程も、ウェルビーイングを向上させる重要な一部として意味づけがなされていた。

また、授業の折り返しとなる中間発表の時期は、方向性の再考やグループ活動の振り返りが必要となる時期でもあった。そのため、教師たちからは「Standing (立ち位置)」に立ち返っていくための声かけがよく聞かれた。そうした中で生徒たちの間でも、迷いや不安定さが渦巻き、課題意識に立ち返ることが求められる難しい時期であったと考えられる。

校則グループは活動の方針を持っていないようで、暇そうな生徒とスライド作成を進める生徒に分かれていた。2コマ目の6時間目にも特段進捗が生まれぬまま授業終了を迎える。他教室でも、企画の実現に向けて重要な課題をなかなか解決できなかつたり、担当する役割(スライド作りや台本作り)によって暇になったりするという難しさがあった。生徒は「これって実現できるのかな?」「準備期間なくない?」と実現可能性に対する不安を漏らし、「皆が幸せになれるってある?」「多数派がウェルビーイングならウェルビーイングなん?」など、授業の根本のテーマに戻った議論をしていた。(2022/10/27 フィールドノーツより)

こうした議論を積み重ね、11 月にはグループごとに企画を発表する会を、生徒主導で行った。学年の教師に加え、校長先生や主幹の教師、ウェルビーイングの授業の導入を行った外部講師らも集まった。生徒たちは発表のために学年の生徒たちへのアンケートや教師たちに対する確認作業なども行い、充実した発表を行っている。「椅子や机の調子が悪くて授業に集中できない」、「学校行事が体育大会以外にないためもっと他クラス・他学年と交流する機会が欲しい」、「全授業の中で5分の休憩を設けて昼休みも伸ばしてほしい」など、生徒たちの様々なアイデアが飛び交う2コマとなった。最後には、改めてウェルビーイングの意味に立ち返り、単なる興味関心だけで投票をしないよう注意もあり、投票が行われた。

発表会を踏まえて、実施する企画は「スポカル」に決まった。実施は3週にわたって行われ、生徒た

ちが考えた外での遊びやカードゲーム、体育館でのスポーツなどに取り組んでいた。実施にあたっては、企画をしたグループの生徒たちがルールや進行方法についてのプリントを作成して説明したり、クラスを跨いで交流ができるように遊びの班決めに思考を凝らしたりと、主体的に活動を進める姿が見られた。そうした工夫もあり、クラスや性別での分断もなく、楽しそうに活動に取り組んでいた。

男女の隔てなく仲良くしている様子が伝わってくる。ババ抜きグループでは、男女が分かれて座って女子同士で負けないように協力しているが、結局男子生徒が諦めて「(ババ以外のカードを)握るかすごいんやもん!」と笑いを誘う。普段は大人びた生徒たちの印象的な姿であった。(2022/12/8 フィールドノーツより)

さらに、こうした雰囲気の中で、別室登校の生徒たちも参加はしないもののイベントの様子を見に来ており、同じ空間を共有することになっていた。

グループ活動から学年での企画の発表会、そして選ばれた企画の実施を踏まえて、単元の最後には学年集会での振り返りも行われた。学級委員の生徒が進行し、生徒たちが感想や課題を振り返る学年集会では、ウェルビーイングという単元のテーマに立ち返りながら、冷静な振り返りがなされていた。

生徒 B「数学の証明を使って振り返りました。1つ目として、スポカルではみんなで遊んだことで、肉体的幸福が満たされました。2つ目に、カードゲームで友好関係が深まって社会的幸福が満たされました。3つ目に、話したことがない人とも一緒にゲームができたことで、精神的幸福も満たされました。以上1.2.3より、肉体的、社会的、精神的に幸福なため、ウェルビーイングなことが証明できました。」

生徒 C「その時だけ精神的にいい状態になるだけで、維持ができなければ、ウェルビーイングではないと思います。けど、運動をする時間ができたのは良いことだと思いました。」

生徒 D「個人的な意見ですが、今回の活動はウェルビーイングじゃないと思いました。私は、相手をどれくらい信用するかが重要だと思います。年月をかけて信用しあって、それでやっとウェルビーイングになると思います。」(2022/12/22 フィールドノーツ)

生徒たちの単元に対する考えはそれぞれであるが、ウェルビーイングの定義や状態の継続性、自身の安心できる関係性の条件など、様々な軸を参照しながらウェルビーイングの向上が実現したかどうかを振り返っている。身近な友達との信頼関係こそが精神的・社会的な幸福であるという考えは、何を目的として、どういった経緯で取り組みを行うのかを主体的に考える生徒たちだからこそその感想だと言える。否定的な意見もあるが、ウェルビーイングの向上の実現を目指して経験を積み重ねられたことは、生徒たちが自分なりのウェルビーイングの輪郭を捉えることを可能にしたと考えられる。

さらに、企画の実施に至るまでの過程にウェルビーイングを向上させる要素を見出した生徒もいた。

生徒 E「ウェルビーイングを考えている時間こそが一番ウェルビーイングだと思いました。同じように目

標を思い描いて、スライドを作るだけでも楽しみが膨らんできました。それぞれが意見や考えを持っているということがわかり、全員がウェルビーイングになるのは難しいこともわかりました。」

今回の単元を通して生徒たちは、普段関わることの多い班やクラスといった枠組みを超えてグループを作り、共通の目標に向かって取り組んでいた。そうした中で互いの意見の共通点や相違点を擦り合わせていくことで、ウェルビーイングの向上を感じたりその難しさに触れたりすることができていたといえる。

こうして一時的ではあってもウェルビーイングが向上する感覚を掴めた生徒たちは、今後の活動に繋げていく方法についても、具体的で充実した発表を行っていた。

生徒 F「学校の動きに取り残される人がいないことがないようにするために、学校に来てない人や教室に入れない人を放置するのではなく、一緒にできる学校にしたいと思います。だから、張り詰めないような雰囲気の良いを持って、でもメリハリをつけていくことが大事だと思います。」
(2022/12/22 フィールドノーツ)

生徒たちは一貫して、普段学校や教室で共に学校生活を送れない生徒に対して考えを巡らせ、その生徒も含めてウェルビーイング向上させられる方法について具体的にイメージをしている。普段の学校生活の中で重要性が指摘される仲間に対する視線を今回の単元にも結びつけながら単元を進行していったことで、A 中学校ならではのよさも引き出しながら実施がなされたといえる。

4.考察

本稿では、デジタルスキル向上の要求の高まりに伴う感情的ウェルビーイングや、社会情動的スキルへの着目、加えて新型コロナ禍での生活様式の変容による重要性を増したウェルビーイングを高めるための取り組みについての実践を報告した。A 中学校では、社会参画力の育成をテーマとした取り組みが小中連携や地域との協働で取り組まれてきていた。しかし、新型コロナ禍の影響により、従来の取り組みを継続することが難しい状況が続いた。加えて、本稿で対象とした学年は小学校では修学旅行に行けず、中学校が始まっても分散登校を強いられるなど、その影響は大きく、特にウェルビーイングを高めることについては重要なテーマであった。

そこで、ウェルビーイングを生徒自身で高めていくための取り組みを、総合的な学習の時間で考え実践する単元を構想した。生徒たちは10のグループに分かれて、全体でプレゼンテーションするための話し合いを行なった。各グループには、定期的にフィールドワークを行なったり、教育実習などで関わった大学生が継続して関わり、ファシリテーションを行なった。取り組み開始時の、ウェルビーイングに対する生徒たちの自己評価は、5点中3点をやや下回るものであり、その理由として、教室にこられていない人がいることや、授業中のメリハリ、などを挙げていた。

実施を通して、生徒たちは学校生活においてウェルビーイングを高める方法を探った。その中では、多様な社会的マイノリティへの視線や多くの生徒のウェルビーイングを高める学校づくりを意識したことなどによって、実現の難しさも経験していた。しかし、それらの経験を支えるように、評価軸や価値観を固定化しない教師の意図や関わりが有意義に働き、生徒たちが今後の行動を具体的に想

像できるような単元になっていたといえる。

年が明けてから生徒たちは命について考える授業を行った。助産師の話聞き、奇跡的な確率の出会いから生まれた命を大切にするとどのようなことなのかを話し合い、いろいろな人たちの話を聞きたい、ということで、地域の保育所や小学校、障がい者施設、地域の居場所などのチームに分かれ、質問を考え、インタビューに出かけた。そのうちの一つのチームは、大学生に話を聞くということで、平安女学院大学子ども教育学部の1回生、2回生、3回生を一人ずつ招き、生徒司会のもと質問が重ねられ、最後に「自分の命を大切にすると」と問う流れた。自身もA中学校を卒業したという1回生は「やりたいことを一生懸命にすることが自分を大切にすること」と答えた。2回生が「中学時代のつらい体験がずっと残っていたが、成人式に出席したことを機に、20年をちゃんと生きられたと感じた」「こころが死んだら、傷つけられたらもとに戻らない」と言うと、男子生徒が顔をあげた。3回生は、「命は、簡単になくなってしまいます。どんなに健康でも、元気でも、ある日突然なくなって、誰にでも起こりえる、それくらい、、、儚い」と静かに、大切に言葉を紡ぎ、生徒たちに「皆さんは、命を大切にすると聞いて、どんなことが浮かび上がりますか」と質問した。生徒たちは、その問いを受け止め、自分たちなりの答えを探し始めた。ウェルビーイングとは何かから始まり、命について考えたこの授業を通じて筆者が感じたことは、様々な出会いのなかでつながりがうまれ、つながりの中で想いや言葉が紡がれていく。その営みが命であり、その温かさがウェルビーイングだということだ。

今後の調査として、昨年行ったアンケートを同時期に実施することを予定している。実際にウェルビーイングが高まったのか、どのような生徒に変化が見られたのか、その要因は何かを検証した上で、次年度のカリキュラム構想につなげていきたい。

謝辞:本研究は、いつも筆者たちを快く受け入れてくださるA中学校の先生方、生徒のみなさんの協力で進めることができました。ここに記して感謝申し上げます。

(1節、2節は新谷が、3節は秋山が担当した。4節は新谷と秋山で担当した。)

(本研究はJSPS科研費JP20K20517(社会関係資本を生かした学校づくり-「力のある学校」の視点から 研究代表:志水宏吉 大阪大学教授)の助成を受けたものです。)

引用・参考文献

OECD(2015), *Skills for Social Progress: The Power of Social and Emotional Skills*, OECD Skills Studies, OECD Publishing, Paris, (『社会情動的スキル:学びに向かう力』経済協力開発機構(OECD)編著、ベネッセ教育総合研究所企画・制作、無藤隆・秋田喜代美監訳、荒牧美佐子[ほか]訳、明石書店、2018年)

OECD(2019), *Educating 21st Century Children: Emotional Well-being in the Digital Age*, (『感情的ウェルビーイング—21世紀デジタルエイジの子どもたちのために』経済協力開発機構(OECD)編著、西村美由起訳、明石書店、2022年a)

OECD(2021), *Beyond Academic Learning: First Results from the Survey of Social and Emotional Skills*, (『社会情動的スキルの国際比較:教科の学びを超える力』経済協力開発

機構(OECD)編著、矢倉美登里・松尾恵子訳、明石書店、2022年b)

高橋重宏『ウェルフェアからウェルビーイングへ』川島書店 1994年

高田一宏『ウェルビーイングを実現する学力保障-教育と福祉の橋渡しを考える-』大阪大学出版会、2019年

福田誠治『北欧の学校教育と Well-being PISA が語る子どもたちの幸せ感』東信堂、2021年

松本真理子編著『日本とフィンランドにおける子どものウェルビーイングへの多面的アプローチ』明石書店 2017年

ユニセフ・イノチェンティ研究所「レポートカード16『子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か』、2020年

https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labo_rc16j.pdf

Hoofst Graafland, J. (2018), "New technologies and 21st century children: Recent trends and outcomes", *OECD Education Working Papers*, No. 179, OECD Publishing, Paris, <https://dx.doi.org/10.1787/e071a505-en>.